

核 デ ー タ 回 想

未来科学技術情報館

天道 芳彦

tendow@nifty.ne.jp

1995 年 (平成 7 年) 9 月に理化学研究所を退職してもう 6 年余になる。理研には外来の研究員のための各種の嘱託研究員制度があって、定年退職者もこれによって数年間、残った仕事を続けることができる。私も退職後 5 年間「共同研究員」という無給の嘱託として、若干の予算をつけてもらって核データの仕事を続けることができた。

現職時代には放射線研究室において、先輩の橋爪朗氏とともにながく核データ編集の仕事を引き受けてきた。内訳は、以下の 3 種類の核データベースのコンパイルである。

- 1) 評価核構造データベース ENSDF のコンパイル。
- 2) 核科学文献 NSR データベースの、日本の二次文献データのコンパイル。
- 3) 荷電粒子核反応実験データベース CSISRS のコンパイル。

1) は、Nuclear Data Sheets の元本を作るもので、シグマ委員会のWGに参加して最も古くから行ってきたものである。いつ頃から始めたのか手元に資料がないので、すぐには分からないが、最初にやったのが $A = 121$ の評価であった。

2) は、かつて国内の二次文献を、ENSDF WG のメンバーが手分けしてやっていたのを、1982 年ごろから理研が単独で原研の委託研究費を受けて行うようになったもので、2000 年の文献まで続けられた。昨年度から私の理研の身分がなくなり中断することになってしまった。

3) は、IAEA の核データセクション (NDS) が中心となって始めた中性子反応断面積データベースを荷電粒子核反応断面積にまで拡大したもので、現在はブルックヘブンの NNDC の主導権のもとで、CSISRS という名前で公開されている。1983 年ごろに、当時の IAEA NDS の岡本氏から理研へ要請があって、世界的なコンパイルネットワークに参加することになった。実働スタッフは、橋爪氏と私と、この頃から加わった K さんという女性のアシスタントの 3 名で、以後ずっと変わらなかった。

アシスタントの K さんは、理研の隣にある団地の主婦であったが、核データ編集の助手としてまことにうってつけの人材であった。書類を整理するのがたいへん好きだということで、自分なりの様々なファイルシステムを構築して、こちらのニーズに即応してくれた。理研の図書館の書庫を知り尽くしていて、この雑誌のこの号はあの棚のこのへんにあると即座に答えることができた。最初、全くの機械音痴というふれこみであったが、生来の強い好奇心もあってか呑みこみが速く、計算機の端末やディジタイザー、各種コピー機、パソコンやそのソフトなどもたちまちマスターして、こちらが教えるを請うようなこともたびたびであった。特にコピー作業が大好きで、急ぐ時うっかりこちらでコピーをやってしまったりするとひどくしかられてしまうのであった。図書館にコピー

の新機種が入ると、飛んでいって館員よりも早くマスターして、機械のそばでくる人みんなに使い方を指導している。熱狂的なジャイアンツファン、自称「ジャイアンツのオーナー」として理研中に名がとどろいていて、たまに阪神が巨人に勝った日の朝などは、熱狂的阪神ファンが、日ごろ馬鹿にされてる恨みを晴らさんものと、電話をかけてくるやら、直接面罵しようと押しかけてくるやら、面白い見ものであった。

NSR データのコンパイルでは、ファイルの大部分を K さんが作成して、私はただ KEYWORDS の部分だけを作ればよかったし、そのあとは、彼女得意のコピー機と製本機、裁断機などを駆使して、原研への報告書をあっという間に作製してくれていた。核データグループがこれまで仕事を続けてこられたのも、実際の作業を K さんが見事に片付けてくれたおかげだと思っている。

私自身はといえば、退職の年の 12 月に西新宿の三井ビルに新設された「未来科学技術情報館」というところに「技術相談員」として勤めることになった。ここは、当時科学技術庁長官であった田中真紀子が、その年の夏ごろに言ったといわれる「日本の子供の科学離れを救うため、諸外国には必ずある「子供のための科学館」を作れ」とのつるの一声によって急遽つくられることになったという噂を聞いた。当時理研の理事長であった有馬朗人氏を名誉館長にいただいて、科学技術庁からの委託費により運営された。職員は総勢 10 人くらいで、三井ビル 1 F の一角を占めるワンフロアだけのこじんまりした展示館である。子供の興味を引く科学的展示物、インターネットやゲームをするパソコンコーナー、原子炉設置申請書のコピーなどの原子力関係の資料が閲覧できる情報コーナー、それに講演会や工作教室などができるミニスペース、事務室といったところが施設のすべてである。

私の仕事は、初めに聞いたときには、女性アテンダントが答えられないような科学技術や、原子力の難しい質問があったときに出ていって答えるだけだということであったが、実際にはそのような機会はほとんどなくて実にひまであった。月に数日程度出勤するだけであったが、しばらくすると、相談員たちも何かやれといわれて、工作教室、実験教室、ミニレクチャーなどを自分たちで企画して実施することになった。最近では中高年のためのパソコン教室までやっている。おかげで月に 17 日も出勤する羽目になってしまったのである。次からつぎへとイベントを考え出さなければならないのだが、結構楽しんでやっている。ここではこれまでの私の人生で、いやみを言われながらもたしなめてきた様々な道楽・余技のたぐい、たとえば、絵、写真、篆刻、天文、パソコンなどなど、ことごとくが「初めて」役に立つことになったのはまことに奇貨と言うべきか。

こんなわけで、情報館のない日に理研に行ったり、核データの作業をしたりという当初のもくろみは、ふと気が付くと淡雪のごとくにかすかになっている。理研にも居場所のなくなった昨今では、核データを思い出そうとしてもすんなりと頭のなかにはいってこないというとんでもない事態に…… いや、これではいけない。WG のみんなに申し訳ない。さいわい来年度からは相談員がイベントをやらなくてもいいことになりそうなので、すこしは核データに時間を割けるようになることを期待している。